

FRN 79-2 -12—6

資料名 敬 徳 公 遺 事

刊・写

軸・帖



冊

所蔵者 九州大学附属図書館

函名 680-ケ12

撮影 富士ゼロックス(株)

昭和54年3月7日

福岡市民図書館

敬德公遺筆全

靜雪園詞				
號	架	函	冊數	印名
五	五	乙	一	卷
五	五	二		內

林氏
 080
 4
 12

PAT. NO. 562819

0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17

680
ケ
12



大



一 御幼奉入法時より圓の大事を言まはる事には在りて
 家勲の事も語りし事ありけり法知米の事ありけり
 去女田川若浦などいふ事ありけり
 一 御幼奉入法時より圓の大事を言まはる事には在りて
 家勲の事も語りし事ありけり法知米の事ありけり
 去女田川若浦などいふ事ありけり
 一 御幼奉入法時より圓の大事を言まはる事には在りて
 家勲の事も語りし事ありけり法知米の事ありけり
 去女田川若浦などいふ事ありけり

一 是子九月の事... 湯中... 入... 是... 子... 九月... 湯中... 入... 是... 子...

一 子... 是... 子... 九月... 湯中... 入... 是... 子...

一 是... 子... 九月... 湯中... 入... 是... 子...

了はるる終らざるは我の志なり

但水戸光圓に於ては中下は十月の月日又後

衣履も自由にして汝に我の志も

兼勝の事なり

一當代法會ありて日人の地を入社の儀に

志はた強減りて事と出む事と並ぶ事

たより我未だ志も減り汝等が志も折る

かとお措き方我未だ人若く新法に

誰とも志角を好む事なく汝等又能く

力に言人汝等も汝等も我未だ由ら

所不し事

一入社の良國自ら志す事なり

一

付ては初耕作も拂ふと汝等も農業

不し事

一國許を治めんと欲す汝等が志は

りておれりて先手も汝等も

有る事乃て汝等が志見れ入る事我未だ

不し事何れ汝等も志す物余も

不し事

九月御辰

赤松

一法會ありて日人の地を入社の儀に

事と出む事と出む事と並ぶ事

たより我未だ志も減り汝等が志も折る

かとお措き方我未だ人若く新法に

誰とも志角を好む事なく汝等又能く

力に言人汝等も汝等も我未だ由ら

所不し事

命を中へ染む美しき法味一種も時と地は
古風の再興とていふ此のやうな作

一 家老目人のあつめし時

神祖

台座と此所表は一物。此を讀むとす。あまの
この法も或方へは長ひ小町を命と命とて
やめ神衣装とて能くあつめお入と喜相
はひあつ又或時、帝範臣靴大袂のあつは
のまゝ系とて讀めあまの

一 中御座市内は、徳とあつ入部の、伏小は、
けり。まゝふ。是とあまの、あつめ、あつめ、
あつめ、あつめ、あつめ、あつめ、あつめ、

徳とあつめ、あつめ、あつめ、あつめ、あつめ、
徳とあつめ、あつめ、あつめ、あつめ、あつめ、
あつめ、あつめ、あつめ、あつめ、あつめ、
あつめ、あつめ、あつめ、あつめ、あつめ、
あつめ、あつめ、あつめ、あつめ、あつめ、

一 入部、あつめ、あつめ、あつめ、あつめ、あつめ、
あつめ、あつめ、あつめ、あつめ、あつめ、
あつめ、あつめ、あつめ、あつめ、あつめ、
あつめ、あつめ、あつめ、あつめ、あつめ、
あつめ、あつめ、あつめ、あつめ、あつめ、



後漢書月... 我... 親友...
の... 皇... 皇... 皇...
國元... 皇... 皇... 皇...
神... 皇... 皇... 皇...

月神名

皇... 皇...

一 月神... 皇... 皇... 皇...
皇... 皇... 皇... 皇...
皇... 皇... 皇... 皇...
皇... 皇... 皇... 皇...

一 月神... 皇... 皇... 皇...
皇... 皇... 皇... 皇...
皇... 皇... 皇... 皇...
皇... 皇... 皇... 皇...

一 月神... 皇... 皇... 皇...
皇... 皇... 皇... 皇...
皇... 皇... 皇... 皇...
皇... 皇... 皇... 皇...

一 月神... 皇... 皇... 皇...
皇... 皇... 皇... 皇...
皇... 皇... 皇... 皇...
皇... 皇... 皇... 皇...

陸津大夫人より大の神明と伝へて源くす
多ひされは神明の文と世中不建と云ひ好ま
らるは是大夫人の心と毎人へと傳へるの法考む
此方け教

一 入部く多ひて後祖光入る者多と宗教く事
一 入厚より起或時傳水戸島山をともて
ましく大法屋の交りて祠堂をくんりりて
しやの事をも傳侍女等より不花と伝も
類此の山と傳て大奥向此業成り事
宗を引入りて何事と云ふやむ志く事
の事苦くしつれと祠堂とく時宗祥
等教教と事とく宗傳の心と云ふ事

文二部禮者くして伝はる事
建事とくしすも孟業の心と云ふ事
堂光高き後者まつて坊はひける事
伝事と云ふ事の宗傳の心と云ふ事

一 法倉の井此意より二坪まうの田と云ふ事
子田中田此田と云ふ事小指事と云ふ事
是より考はる又是程の田と云ふ事
がくも云ふ事と云ふ事と云ふ事

一 西の邊事小義公け後く事と云ふ事
さむく事と云ふ事と云ふ事
はる事と云ふ事と云ふ事

昔小松欵一のひら水谷公と法書あり
返書ありとあり 扇房も法書ありとあり
事ごとかこはるる一とあり 法書ありとあり
教をえを授けむかゝる儀一とあり 法書ありとあり
法もなぬぬに法乳するものあり 奸偽も欲
りものあり 皆のしるるなり 規矩もして
人ごしれ 扇房も一とあり 法書ありとあり
おもふ心とあり 法書ありとあり 法書ありとあり
大人の心も人の志も一とあり 世の志も一とあり
不と記して法書ありとあり

一 用人は年より人々多かれ 勤則志けきす 文武の藝術
たよりより一とあり 出はのほる 法書ありとあり

ちり一とあり 勤則のり 法書ありとあり
法し又平ののり 用人の後も一とあり 法書ありとあり
世の文書も一とあり 我も法書ありとあり
筆書入るのしるる一とあり 文武の文書ありとあり
と集め古字録の法書ありとあり 漢字も一とあり 文書あり
先是と法書ありとあり 法書ありとあり 法書ありとあり
時がふれも文字ありとあり 法書ありとあり 法書ありとあり
一とあり 法書ありとあり 法書ありとあり 法書ありとあり
一とあり 法書ありとあり 法書ありとあり 法書ありとあり
一とあり 法書ありとあり 法書ありとあり 法書ありとあり

一 法書ありとあり 法書ありとあり 法書ありとあり
けん 扇房の法書ありとあり 法書ありとあり

心算機材を請附けしむる費用も是より少くはらむべし
活字の用も金紙の用も村治の用も此の用も免る用も
少くはらむべし甲の用も少くはらむべし乙の用も少くはらむべし
林の用も少くはらむべし丙の用も少くはらむべし
丙の用も少くはらむべし丁の用も少くはらむべし
十騎の用も少くはらむべし十一騎の用も少くはらむべし
能るは其の用も少くはらむべし十二騎の用も少くはらむべし
丙の用も少くはらむべし十三騎の用も少くはらむべし
丁の用も少くはらむべし十四騎の用も少くはらむべし
戊の用も少くはらむべし十五騎の用も少くはらむべし
法有の用も少くはらむべし十六騎の用も少くはらむべし
人教の用も少くはらむべし十七騎の用も少くはらむべし

本若の用も少くはらむべし十八騎の用も少くはらむべし
丙の用も少くはらむべし十九騎の用も少くはらむべし
丁の用も少くはらむべし二十騎の用も少くはらむべし
戊の用も少くはらむべし二十一騎の用も少くはらむべし
己の用も少くはらむべし二十二騎の用も少くはらむべし
庚の用も少くはらむべし二十三騎の用も少くはらむべし
辛の用も少くはらむべし二十四騎の用も少くはらむべし
壬の用も少くはらむべし二十五騎の用も少くはらむべし
癸の用も少くはらむべし二十六騎の用も少くはらむべし
甲の用も少くはらむべし二十七騎の用も少くはらむべし
乙の用も少くはらむべし二十八騎の用も少くはらむべし
丙の用も少くはらむべし二十九騎の用も少くはらむべし
丁の用も少くはらむべし三十騎の用も少くはらむべし

一 活字の用も少くはらむべし
二 金紙の用も少くはらむべし
三 村治の用も少くはらむべし
四 免る用も少くはらむべし
五 甲の用も少くはらむべし
六 乙の用も少くはらむべし
七 林の用も少くはらむべし
八 丙の用も少くはらむべし
九 丁の用も少くはらむべし
十 十騎の用も少くはらむべし
十一 十一騎の用も少くはらむべし
十二 能るの用も少くはらむべし
十三 丙の用も少くはらむべし
十四 丁の用も少くはらむべし
十五 戊の用も少くはらむべし
十六 法有の用も少くはらむべし
十七 人教の用も少くはらむべし
十八 本若の用も少くはらむべし
十九 丙の用も少くはらむべし
二十 丁の用も少くはらむべし
二十一 戊の用も少くはらむべし
二十二 己の用も少くはらむべし
二十三 庚の用も少くはらむべし
二十四 辛の用も少くはらむべし
二十五 壬の用も少くはらむべし
二十六 癸の用も少くはらむべし
二十七 甲の用も少くはらむべし
二十八 乙の用も少くはらむべし
二十九 丙の用も少くはらむべし
三十 丁の用も少くはらむべし

冷いぬ思あつるの折る一若後のの極致と云ふ事
當日の湯遊まに六日よりつらなりし事
中より終りし九のまはりのひかりの甲斐
の事い影ひきし一もかゝるに中四十の
月よりともつるの冷く思ふまはりの
たぐよに泪光の神靈成教言する下は
の大事もよかつ事河原にさふりし
元一し河原もん事の悲しきやうに
とせよは湯蒸氣の後一宿直して
後と何の眼一條二條三條の
ぬ湯末の士もとて一人少くも
懐散一若し事

固も報する入説と云一寺情の事
る靈地下に表候し冷むる百子れ
推れしつも増しんも



